

いれずみ奉行

講談名作文庫 8

いれずみ奉行

昭和51年3月10日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112 振替 東京3930

電話 東京(03)945-1111(大代表)

編集 講談社出版研究所

印刷 廣濟堂印刷株式会社

製本 株式会社若林製本

Printed in Japan ©KODANSHA 1976

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

講談名作文庫

8

いれずみ奉行

講談社

本シリーズは、昭和29年に小社より刊行された『講談全集』の文庫版選集です。今回の刊行にあたって現代表記に改めました。

〈編集部〉

目次

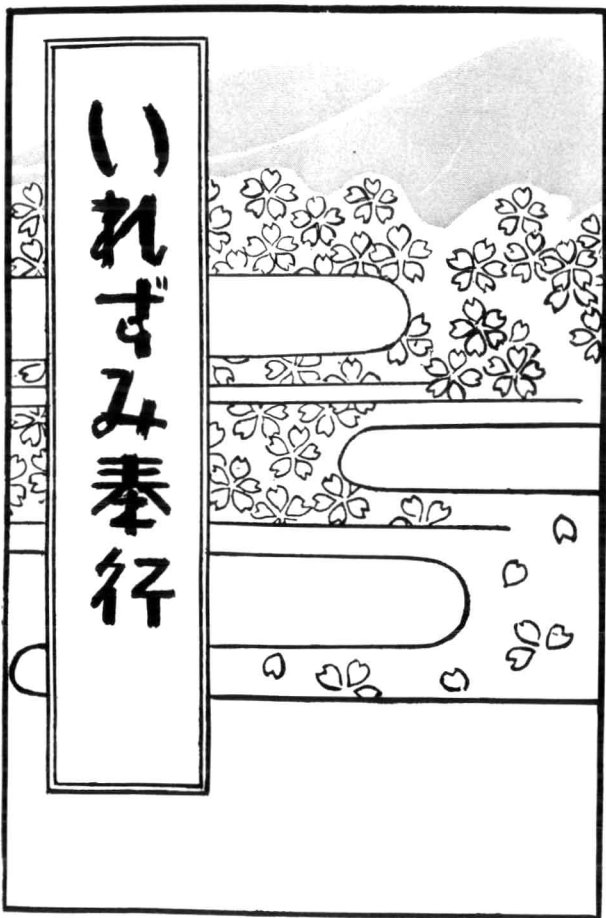
両刀を捨てて炭屋の居候……	九
喧嘩ならいつでも参れ……	一八
お島、白玉、恋の鞘当て……	二七
いや、面目次第もござらぬ……	三
男禁制の看板の塗りかえ……	三九
うまく手管でだますんだな……	四〇
廓の用心棒、屋上の大格闘……	五〇
遠山桜に上り竜下り竜の刺青……	六
泊まつたらお島に叱られる……	六
父左衛門尉はらはらと落涙……	七
あなたはわたしを手籠めにでも……	七九
旦那もお仲間かと存じて……	八四

離子方金ちゃんの止め男……………	九
吉原組は黙って帰ってくれ……………	九
ちと奢りが過ぎやしねえか……………	一〇五
ご生母は亡くなられましたぞ……………	一〇八
イミテーションの団十郎……………	一一三
お島いとしや涙の死に別れ……………	一二〇
慕いよる二八の女軽業師……………	一二八
小普請入り近藤重蔵の屋敷……………	一三五
早くも見ぬいた両雄の心底……………	一三八
お声がかかりで跡目相続……………	一四六
くつろいだ親子再会の儀……………	一五三
今宵を名残の廓大尽……………	一五七
廓の暇乞いに白玉を身請け……………	一五九
それっ！ 怪しきやつが……………	一六六
七日の内に盗んでみぬか……………	一七三

こりやつ鼠小僧来たかつ……………	一八〇
だいぶ酒が過ぎたようだのう……………	一八四
台湾島流浪者の取り調べ……………	一八八
地獄へ金を持っていく気か……………	一九五
とんだところへ現れた武士……………	二〇一
高野長英もさじを投げた……………	二〇六
この頭巾に覚えござらぬか……………	二〇九
これでも剣術指南か……………	二一六
蘭学者といえは目のかたき……………	二二一
吹上の御前裁きに初登場……………	二二四
さすがその道の通人ぶり……………	二三四
来訪客の往来しきり……………	二四三
今も昔も変わらぬ役人根性……………	二四六
あの手この手で奢侈禁止……………	二五三
奢りの海老蔵にきつい咎め……………	二五八

金食い印旛沼の埋め立て工事……………	二六五
乗り込む密偵、左衛門尉……………	二六九
一げえに男がほしくなった……………	二七九
無理押し、苦肉の金策評定……………	二八六
天保銭吹き直しが運の尽き……………	二九三
酔いどれの口から泥を吐く……………	三〇〇
悪玉茂平次だまし討ち……………	三〇六
狐を使って恋の遺恨晴らし……………	三一
兄弟はじめて父の仇を知る……………	三四
胴輪斬り、仇討ち本懐……………	三九
罪を憎み人を憎むな弔えよ……………	三三

いれずみ奉行



両刀捨てて炭屋の居候いせうろう

ええ、この度はお求めによりまして、遠山左衛門尉とよやまさ へいもんのかみの一代記を長講いたします。なにとぞご清読のほどを幾重にもお願い申し上げます。

さて徳川治世三百年の間におきまして、名奉行と称せられた方が五人でございます。第一は岡越前守おかえりぜんのかみ、第二が依田豊前守よだ ぶぜんのかみ、第三が曲淵甲斐守まがりふちのかいのかみ、第四が根岸肥前守ねぎしへいぜんのかみ、第五は遠山左衛門尉とよやまさ へいもんのかみ、いずれも江戸町奉行で、このなかでもこの遠山左衛門尉景元かげもとはすこぶる下情に通じ、なかなか粹こゝろな、さばけたお方、名を金四郎と申し、背中一面に遠山桜とよやまざくらの刺青いれずみをしているところから、世間では刺青奉行などとあだ名しているくらい。

この江戸町奉行というのは当今の知事市長、警視總監と裁判官、この四つを兼ねたくらいの高役目で、与力よりき二十五騎、同心百二十人を従え、南町奉行、北町奉行の二つに分かれ、隔月交代で勤めたものでございます。

本講談の主人公、遠山左衛門尉景元は、民間に長くおられた方だけに、いわゆる官僚臭いところがございます。当今でいえばひじょうに民衆的なお方で、労働問題でも、民衆娯楽の問題でもないしは花柳界かろうかいのことでもことごとくご承知というのですから、公事争いこうじあらそい、万事がごく円満に解決されるというところから、名奉行の名があつたのでございましょう。

この方のお父さんは遠山河内守とやま かわちのしゅ後左衛門尉ごさゑもんゑいに任官、お祖父さんがやはり左衛門尉とおおせられて、長崎奉行をお勤めになつたお方。小石川清水谷こいしかわしみずやに住まい、禄高二千石、父河内守殿は若いころから文武両道にいそしみ、なかなか評判の方でございます。奥方は同族の遠山美濃守のお娘お国どの。夫婦仲もいたつてむつまじかったがどういふものか子宝というものがございませぬ。

徳川幕府のころは世継ぎなきときはお家断絶というお定めでございましたから、河内守ご夫婦もひじょうにこのことについて心を悩まされた結果、奥方の得心のもとに、本郷の小間物屋渡世清助という者の娘お美乃を入れて側室といたしました。ところがこのお美乃はまもなく懐妊、生み落としたのが玉のような男の子。

河内守のお喜びはひととおりではございません。名を金四郎とつけ、掌中の珠と愛しみ育てておりましたが、この金四郎が二歳のとき、正室お国の方がご懐妊、月満ちて生まれたのがこれまた男の子、金之丞と名づけられましたが、これは世間によくあることで、夫婦の間に子がないからというのでもらい子をする、とまもなく実子が生まれる、それがために家内にいろいろ悶着が起きすることは珍しくないことでございます。

ところがこのお国の方はなかなかの賢夫人で、この二人の子供に差別というものを決してつけない、同じようにかわいがって育てております。

ところが兄の金四郎の方は目から鼻にぬけるという利口さですが、弟の金之丞は何事にも目立って疎いものですから、兄君の利口さに比べて弟君はあまりに劣りすぎるなどと、家来の者などの間に噂がある。

そのうちに金四郎は湯島の聖堂に通つて經書けいしょの講義を聞くようになりましたが、一を聞いて十

を知るといふくらいめきめきと進んでまいります。柔術は洪川流、剣術は一刀流、そのうえ書を書いてもなかなか手筋がよく、すべて、物事に器用ですから、碁、将棋、俳句にいたるまでおよそこれといつてできないことはございません。それと反対に弟の金之丞はなにをやらせてみても、いっこうにはかどりません。ことに体があまり丈夫でないものですから、常に引き籠もりがち、河内守ご夫婦もいろいろご心配をなされるものの、どうもこれは生まれつきで仕方がございません。

かくて月日は流れて、金四郎は十九歳、金之丞は十七歳とあいになりました。そこで父河内守殿も今のうちに早く家督相続者を決めておかねばならぬとお考えになりましたが、なんとしても、金四郎は妾腹、お国の方は心のよく練れた方ですから、表向き病身の金之丞に相続させたいとは申しませんが、そこは血を分けた親子の情愛、たまには金四郎さえいなければと思わぬものでもありません。そこを察しましたはさすがに金四郎、ある日父に向かつて、

金「なにとぞ家督の儀は弟金之丞に、相続いたさせ下されますようお願い申しあげます」

河「いや、その方は庶子とはいえ、当家の長男、金之丞は本腹とはいえ次男じゃ。よつて当家はその方に相続させる所存、金之丞はいずれ他家へ養子につかわす考えじゃ」と、こつてききません。さあ金四郎は困つてしまい、つくづく考えるには、

「まことにありがたいおおせではあるが、これは義母に対してあいすまない次第、たとえ金之丞は病身とはいえ、ここはぜひ金之丞をもつて跡目を継がせなければならぬ。それには自分がこの屋敷にいては、父はもとより義母も承知はしてくれまい。さればといつて他家に養子なども面白くない、いっそ、自分から武士を捨てるのが一番だ、両腰捨てて町人となり、自由に世を送るの

も面白い、そうだ、弓矢を捨てたとて男子の活躍の舞台は別にあるはず、いや、われながらよいところ、に気がついた」

と、胸に問い腹に答えておりましたが、十九年の間住みなれた、なつかしいわが屋敷を捨てて行くというのは、容易にできるものでは、ございません。



義心鉄石のごとき金四郎も、少し涙にくれておりましたが、やがて決心の臍を固めると、

父上様、お心に背き、さぞ不孝なやつとお怒りもございましょうが、家出いたしましたしても決してご恩を忘れるわけではございません。なにか事の起りました節には、いかようのことがあろうとも陰ながらお力になります所存。私の心中どうぞお察しおかれ、幾重にもお許しのほど願ひあげます。

と、書き置きをしたため、ここ



金之丞に譲りたい所存じゃ」

左「そのおぼしめしは一応ごもつともではございますが、お二人しかないお子様、それに金之丞様は生来のご病身、なんとかおとどまりを」

にいよいよ覚悟を定めまして、身仕度をキチンと整え、ずーっと庭先から出ようとしたが、やがて用人小堀左内の部屋へやってまいりました。この左内という用人は主人思いの忠義者、ことに金四郎の立場にはひじょうに同情いたしております。左内の妻女が、

妻「おお、これは若様でございますか。まあお入り遊ばせ」

金「左内はいるか」

左「これは若様、お仕度をなさつて、いずれへお越しでございますか」

金「拙者、考えることあつてひとまず当家を立ち退いて、跡目は

金「いや、その心入れはかたじけないが、なんといおうとこの気持ちとはどめることはできぬ」
 左「それではいたしかたもございませぬが、して若様はいずれへおいでなさるおつもりでござ
 います」

金「いずれへと申して別に行くべきところもないが、聖堂で懇意にいたした麻布の保科の屋敷
 へでもまいって、当分厄介になろうかと存じおる」

左「それも結構には存じますが、そうなれば事が大仰すぎていかなものでございましょう。
 ついては妻の弟で三之輪町に薪炭渡世をいたしておる者がございます。それへおいでになって、
 当分身をお隠し遊ばせ。たとえご分家になりましたも、ご満足のいきますように、私も心をつく
 しますゆえ、それへおいでなされてはいかがでございます」

金「うむ、三之輪の炭屋だな、それはよく存じておる。いづぞや薪炭を持ってまいったが、名
 前は確か太吉と申したな」

左「さようでございます」

金「それはありがたい、早速まいって厄介になることにいたそう」

左「さようなれば私が同道いたしましょう」

金「いや、それには及ばん。拙者一人でたくさんだ」

左「では少々お待ち遊ばせ、失礼ながらお小遣いをなんかいたしましょう」

妻のお菊にいうて、小粒を取り交ぜ十両ばかり紙入れとともにそれへ出しました。なかなか用
 人などで十両という金は容易ならぬものですが、この人達の心掛けはまことに感心なものでござ
 います。

左「また後々のことはお屋敷へ申しあげてなんとかいたします。これはほんの当座のお小遣いでございます」

金「それは千万かたじけない。しからばこれはもらっていくぞ」

左「してなにか、お書き置きなさいましたか」

金「机の上に置いてまいった。どうかお父上にご覧にいれてくれ。なお、おまえからも相続は金之丞をお立て下され、金之丞相続のうえは再び家にも立ち戻ろうと申していたと伝えてくれるよう。さらば……」

左「若様、それではごきげんよう、明日にも私お伺いたします」

金「いや、なにも無理して来てくれぬでもよい。両三日うちに、もし暇でもあったらまいってくれるよう、さらばじゃ……」

と、ひょいと表へ飛び出しました。

金「ああ、これでようやく自由の身になったものの、父上は定めしご心痛であらうな」

思いにふけて歩みを運ぶ。ただ今なれば電車で清水谷町から御徒町乗り換えでまいれば三之輪新町、造作もないようなものの、そのころ駕籠へも乗らず歩いてまいりましたのですから、かなりの道のりで、日の暮れ方にようやく太吉の門口へまいりました。

金「許せよ」

太「へい、いらつしやい」

太吉はもう五十幾つという年輩、店さきを片づけておりましたが、太「ええとなたさまで……」